

平成 29 年 6 月 4 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25284002

研究課題名(和文) 多角的視座からの「感情」現象の哲学的解明を通じた価値倫理学の新たな基礎づけの試み

研究課題名(英文) A New Attempt to Ground Value-Ethics through Philosophical Clarification of "Emotion" from a Multidisciplinary Perspective

研究代表者

古荘 真敬 (FURUSHO, Masataka)

東京大学・大学院総合文化研究科・准教授

研究者番号：20346571

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 6,100,000円

研究成果の概要(和文)：「感情」現象をあらためて哲学的に吟味することを通して、倫理的価値の発生する根源的な場所を明らかにし、ひいては新たな価値倫理学の基礎づけを試みることを、それが本研究の目標であった。われわれは、現象学、中世哲学、心の哲学、分析哲学、現象学的精神病理学、精神分析という、各研究分担者の専門的視座から持ち寄せられたさまざまな「感情」研究の成果を相互に批判的に比較検討することを通じて、人間存在にとっての感情現象の根本的意義(謎にみちたこの世界において行為し受苦するわれわれにとっての感情現象の根本的意義)を明らかにする多様な成果を上げることができた。これにより上記目標の核心部分は達成されたと言いうるだろう。

研究成果の概要(英文)： This research attempted to reexamine the phenomenon of "emotion" so as to look for the origin of our ethical values and to clear the ground for our future value-ethics. First, we critically compared various investigations about this common theme to each other, from the viewpoints of phenomenology, medieval philosophy, philosophy of mind, analytic philosophy, phenomenological psychopathology, and psychoanalysis, each of which each member of us specializes in. Then, we successfully explored the fundamental roles of the emotion for the human being as an acting and suffering person in this world full of dilemmatic situations. The heart of the above-mentioned huge purpose of our research was achieved through this exploration.

研究分野：哲学・倫理学

キーワード：感情 価値 道徳 倫理

1. 研究開始当初の背景

研究代表者の古荘は、2008年から2012年までの論考において、ハイデガーやアンリなどによる「感情(情態性 *Befindlichkeit*・情感性 *afféctivité*)」論を取りあげて、われわれ各人が「自己」であることの核をなす存在感情・生命感情の構造を分析し、また、詩的芸術における情感性の表現を解釈しながら単なる「自己触発」概念によっては捉えきれない自己感情の構造についての考察を深めるべく努力していた。しかしながら、こうした研究においては、良くも悪しくも「自己」の実存に関わる感情に主たる関心が寄せられていたため、現象学的感情論一般の展開としては、いささか視野が狭く限定されすぎていることを自覚せざるを得なかった。

哲学史を簡単に振り返るだけで、「感情」という現象は、一方では、合理的な判断や意志遂行を阻害する動物的情動の反映のようなものとして捉えられがちであると同時に、他方では、それなしには何らの「道徳」も「社会」も成立しえない規範的価値認識の基盤ないし源泉とも見なされることがあったことに気づくが、たとえば後者のような「道徳感情論」的着眼は、古荘のこれまでの研究に決定的に不足していた重要要素の一つである。本来、『存在と時間』の「良心」論等を注意深く分析するならば、ハイデガー自身もまた、実は、そうした感情論の系譜を十分踏まえていたことが明らかになりうるであろうし、また、さらにかえりみれば、ハイデガーに先んじてシェラーにおいても、如上の思想的文脈を継承しながら、「感情」のうちに、価値倫理学にとって根源的な基礎現象を見出すとする発想が明白に見てとられる。われわれのもつ「感情」は、単なる生理的感覚とは異なる「信念依存的」な心的状態であると言われることがあるが、そればかりではなくシェラー的な見方によれば、およそ何らかの価値的な意味づけにおいて世界を了解し「信念」を形成すること自体が、もともと「感情」的に規定された過程でしかありえないのである。こうした見方のうちには、「感情」を、およそ文化的・倫理的な社会を形成しつつ生きる「人間」であるわれわれにとって原理的な意義をもつ極めて基礎的な現象として捉え返す発想が見てとられる。

本研究が、組織的な共同研究を通じて是非とも発掘したいと考えたのは、哲学史上に現れたこうした明敏な着想に学びつつ、「感情」現象を今日の学問動向に応じた多角的視座から哲学的に解明することを通じて、現代にふさわしい価値倫理学を新たに基礎づける可能性であった。

同様の研究動向は、ヒュームやアダム・スミス以来の道徳哲学の伝統を継承する英語圏の哲学において、今日ますますアクチュアルなものとなりつつあるように思われた。一方において、脳科学・認知科学における感情

研究の進展は、「感情」と「倫理」の結びつきに関する自然主義的な理解を本質的に新たな局面へと遷移させつつあり、いわゆる「脳神経倫理学」の理論的基礎の確立が焦眉の急とされているが、他方ではまた、たとえばヌスバウムが、大著“*Hiding from Humanity: Disgust, Shame, and the Law* (邦訳『感情と法』)”(2004)において、「人間の平等を尊重するリベラリズム」の感情的な基礎をめぐる議論を詳細に展開していることなどが目を引いたのである。

だが、わが国の従来現象学・分析哲学・心の哲学等々の現代哲学の諸分野において不足しがちであったのは、こうした、共同体の歴史を形成する規範的価値意識の発生をめぐる倫理学的問題までを視野に入れたスケールにおける「感情」研究の豊かな展開であるように、われわれには思われた。そうした現状を打破して、日本語による哲学的思考の空間において、英語圏のそれに比肩しうるような射程と深度をもった感情哲学の議論が活発に行われるようになるため、われわれは是非とも、現象学・分析哲学・心の哲学・精神分析といった諸領域間の壁を取り払った共同研究を強力に推進し、人間存在にわたる「感情」現象の意味を多角的に解明することを通じた新たな価値倫理学の基礎づけを企図したいと考えた次第である。

2. 研究の目的

社会的・文化的に規定された世界の内に生きる「人間」であるわれわれにとって、いったい「感情」という現象は、何を意味しているのか。一方では、合理的な判断や意志遂行を阻害する動物的情動の反映としても捉えられがちな「感情」は、他方では(いわゆる道徳感情論の系譜において)、それなしには何らの「道徳」も「社会」も成り立ちえない規範的価値認識の基盤としても見なされることがある。

本研究の目的は、西洋哲学史におけるこうした「感情」概念の重層的意味づけを広く検討しながら、「感情」現象をめぐる現代の現象学・分析哲学・心の哲学・精神分析による最新の考察をここに突き合わせ、批判的に総合することを通じて、われわれの共生空間に生成する倫理的価値の基礎を哲学的に解明しようとするのであった。われわれは、「感情」現象をそのような多角的視座から哲学的に解明することを通して、現代にふさわしい新たな価値倫理学を基礎づけるための途を共同で探索していこうと考えた。

3. 研究の方法

「感情」に関する総合的研究をめざし、現象学、中世哲学、分析哲学、心の哲学、現象学的精神病理学、精神分析の専門家からなる8名の研究チームを編成し、各自の担当課題

を決めて共同研究を行うこととした。本研究チームはメンバー全員が同一のキャンパスに勤務しているため、日常的に各自の研究進捗状況について情報交換を行いながら、年に数回、共同討議の機会を積極的に設定し、各自の研究成果の惜しめない共有と相互批判を図っていくこととした。

初年度は、「感情」現象の自然的性格と人間の合理的思考との関係、という論点に関する、各専攻分野における最先端の議論を整理しつつ、「感情」概念の内実を明確化することに努めた。第2年度は、初年度の作業を引き続き深めながら、人間の規範的価値認識にとって「感情」の果たす役割について、各分野の見地から徹底検討することにした。第3年度は、以上の成果を踏まえ、現代社会の諸課題に呼応する新たな価値倫理学を基礎づけるためには、広範な感情現象の諸相のなかで特にどのような具体相に着目して考察を深めるべきであるかが集中討議される予定であった。しかしながら、研究代表者の古荘真敬と研究分担者の信原幸弘、山本芳久の3名が参加して本研究課題の総括を行う学会ワークショップの開催が平成28年10月に繰り延べになったため、本共同研究全体を第4年度まで期間延長し、より時間をかけて精緻な仕方でもこれまでの互いの研究成果を突き合わせながら、上記第3年度の課題をさらに継続して考究することにした。

4. 研究成果

「感情」現象をあらためて哲学的に吟味することを通して、倫理的価値の発生する根源的な場所を明らかにし、ひいては新たな価値倫理学の基礎づけを試みることで、それが、先述のとおり本研究の目標であった。われわれは、この共通した問題意識のもとで、現象学、中世哲学、心の哲学、分析哲学、現象学的精神病理学、精神分析という、各メンバーの専門的視座から持ち寄られたさまざまな「感情」研究の成果を相互に批判的に比較検討することを通じて、人間存在にとっての感情現象の根本的意義（謎にみちたこの世界において行為し受苦しむわれわれにとっての感情現象の根本的意義）を明らかにする多様な成果を上げることができ、これによって上記の研究目標の核心部分を達成することができた。各メンバーによる個別の研究成果の概要は、次の通りである。

まず、研究代表者の古荘真敬は、ハイデガールの「情態性」分析および「根本気分」論の意義をあらためて徹底検討することを通して、世界の言語的構成と感情現象との関連について再考し、ミシェル・アンリの「情感性」論との批判的対峙を試みた。また、道徳的な行為主体の自己理解にかんして、いわゆる「テューケー」の理解をめぐる古典的問題についての考察を進めながら、上記の「情態性」論に九鬼周造の運命論の解釈を接続する構

想を練り、その中間成果を論文として発表した。

次に石原孝二は、ブランケンブルク、木村敏、スタンゲリニらの現象学的精神病理学の成果を踏まえながら、共通感覚の障害、つまり感覚的・感情的な障害を統合失調症の基盤とみなす現象学的精神病理学の見方を批判的に検討するとともに、共通感覚に関する思想を「身体化された心」(embodied mind)アプローチや西田哲学との関係を考察し、その成果をChung-Ang大学(韓国)で開催された国際会議とベルリン自由大学で開催された国際会議で発表した。

さらに梶谷真司は、命とりわけ子どもの命に対する感性や感情が、歴史的にどのように形成され、変化してきたかを日本の中世から近世にかけての様々な文書や文献を通して考察した。その結果、子に対する愛情のような一見普遍的で自然に見える感情が、特定の社会条件の下で成立したあと、さまざまな試行錯誤を経るうちにその条件が自明なものとなった結果“自然な感情”として現れることを突き止めた。このことは感情一般の歴史性・文化的規定性を示唆している。

そして高橋哲哉は、ヴァルター・ベンヤミンの『暴力批判論』、ハンナ・アーレントの『全体主義の起原』、ジョルジュ・アガンベンの『ホモ・サケル』など現代思想の知見の理論的再検討と同時に、韓国・光州事件、日本の靖国神社など20世紀における「非業の死者」の追悼の個別事例を検証することで、喪の作業を抑止して死の意味付けに向かう「犠牲の論理」における「感情の錬金術」を考究した。

また信原幸弘は、道徳的ディレンマにおける情動の働きにかんする研究を展開した。たとえば、泣く赤子のディレンマ(crying baby dilemma)では、赤子の口を塞げば、多くの方が助かるが、赤子は窒息死するし、赤子の口を塞がなければ、赤子も含めて多くの方が殺される。このディレンマでは、赤子の口を塞ぐほうがそうしないより正しいと言えるだろうが、塞ぐことがそれ自体として正しいとは言えないだろう。というのも、赤子の窒息死という悪が多くの人々の救命という善によって帳消し(canceling)にされはしないからである。理性的にはそのような帳消しが可能かもしれないが、情動的にはそれは不可能であり、赤子の口を塞いだ者は罪悪感に苛まれるをえない。信原は、情動のあり方がこのようなディレンマにおける正しい行為の不在を説明することを明らかにした。

また野矢茂樹は、意識と実在の二元論を排し、かといって意識の一元論に立って他者の姿を見失うこともなく、知覚における素朴実在論を確立するために、考察を重ね、議論を尽くした。その結果、「眺望論」と「相貌論」と呼ぶ理論を提唱するに至った。眺望論とは、対象のあり方とそれとの空間的位置関係の関数である「知覚的眺望」と身体状態の関数

である「感覺的眺望」から、知覚および感覺経験を論ずるものである。他方、相貌論は意味という観点から経験を捉える。ここにおいて「意味」は「物語」と理解され、感情をも含みもつ形で知覚が捉えられることになる。こうした考察は著作『心という難問』（講談社、2016年）として出版された。

また原和之は、精神分析学の観点から、「不安」という情動が人間の主体性の形成において果たす役割について検討した。フロイトのいわゆる「オイディプス=コンプレックス」のラカンにおける読み直し（いわゆる「欲望の弁証法」）を再検討することにより、ラカンの中期と後期の議論をつなぐ要素を明らかにし、主体の心的発達性の性差についての一貫した見通しを与えることに成功した。またその延長線上において、ラカンの議論とその影響下で展開されたドゥルーズの『意味の論理学』における議論（いわゆる「動的発生」）との関係を明らかにした。

さらに山本芳久による最大の研究成果として、『トマス・アキナス 肯定の哲学』（慶應義塾大学出版会、2014年）が刊行された。本書は、西洋中世を代表する哲学者であるトマス・アキナスが「感情(passio)」をどのように理解していたのかを、トマス哲学の中軸を構成する神論・人間論・キリスト論のそれぞれに即して体系的に考察したものである。感情論に着目したトマス研究はわが国においては未だ殆ど行われておらず、本書を通じて、トマスの倫理学についての新たな視座が示されることになった。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計 11 件)

原和之「「アンテ・アンチ・オイディプス」あるいはもう一つの「オイディプス」-ラカンの「欲望の弁証法」とドゥルーズの「動的発生」」『I.R.S.--ジャック・ラカン研究 第15号』、査読無、2017年、pp.65-87.

古荘真敬「運命を生きること-九鬼周造の運命論にかんする一考察」、『現代思想 2017年1月臨時増刊号 九鬼周造』、査読無 2016年、pp.106-117.

古荘真敬「感情と言語 -アンリとハイデガーのあいだで」、『ミシェル・アンリ研究 第6号』、査読無、2016年、pp.47-71.

高橋哲哉「犠牲の論理とキリスト教への問い」、『神学研究 第63号』、査読無、2015年、pp.1-14.

山本芳久「エロース、アガペー、カリタス：ルージュモンからアウグスティヌスへ」、『nyx 第2号』、査読無、2015年、pp.278-293.

高橋哲哉「琉球共和社会と無条件的なもの」、『思想』1088号、査読無、2014年、pp.3-10.

原和之「フロイト=ラカンにおける「不

安」：構造論的アプローチとその射程」、『I.R.S.--ジャック・ラカン研究 第12号』、査読無、2014年、pp.25-66.

山本芳久「井筒俊彦とキリスト教：存在論的原理としての愛」、『三田文学』、査読無、2014年、pp.126-151.

古荘真敬「言語・存在・自己への問い-あるいは死すべき各自性の共同生起について-」、『西日本哲学年報 第21号』、査読無、2013年、pp.137-154.

山本芳久「トマス・アキナスの感情論：『肯定の哲学』の基礎づけ」、『上智大学神学会編『カトリック研究 第82号』、査読有、2013年、pp.35-90.

山本芳久「トマス・アキナスのキリスト論：『肯定の哲学』の原点」、『教父研究会編『パトリステイカ 第17号』、査読有、2013年、pp.131-154.

〔学会発表〕(計 7 件)

信原幸弘「悲劇的ディレンマと情動」、『哲学会第55回研究発表大会、ワークショップ「情動の哲学」』、2016年10月29日、東京大学本郷キャンパス（東京都文京区）

山本芳久「トマス・アキナスの感情論（ワークショップ「情動の哲学」）」、『哲学会第55回研究発表大会、ワークショップ「情動の哲学」』、2016年10月29日、東京大学本郷キャンパス（東京都文京区）

原和之「ラカンにおける「欲望」とその「対象」-「エディプス」的布置とその再編成」、『日本ラカン協会第15回シンポジウム「欲望機械」と「欲望の弁証法」ガタリ、ドゥルーズ、ラカン』、2015年12月13日、専修大学（東京都千代田区）

信原幸弘「道徳的情動は何ゆえに道徳的なのか」、『日本科学哲学会、2015年11月22日、首都大学東京（東京都八王子市）

Kohji Ishihara, "Common Sense, Affect, and Mental Disorders: Embodied Mind Approaches and Philosophy of Psychiatry," The 6th International Conference on Comparative Studies of Mind, 2015年8月21日、Chung-Ang University, ソウル（大韓民国）

山本芳久「トマス・アキナスの感情論：肯定の哲学」第三回道徳・社会認知研究会、2015年2月14日、東京大学駒場キャンパス（東京都目黒区）

原和之「フロイト=ラカンにおける「不安」の構造」、『日本ラカン協会第15回ワークショップ：セミナー第10巻「不安」をめぐって』、2013年7月21日、専修大学（東京都千代田区）

〔図書〕(計 10 件)

野矢茂樹『心という難問』（講談社、2016年）全394頁。

古荘真敬、秋富克哉、安部浩、森一郎共

編『続・ハイデガー読本』(法政大学出版局、2016年)全406頁

山本芳久「トマス、スコトゥス、スアレス:「スコラ哲学」の解体と再建」、上記『続・ハイデガー読本』所収、2016年、pp.44-51.

原和之「救済の二つの時間:三島を用いてラカンを」、井上隆史他編『混沌と抗戦:三島由紀夫と日本、そして世界』所収(水声社、2016年)pp.331-345.

梶谷真司「「命」の今と昔 歴史との対話としての哲学」、東京大学教養学部編『高校生のための東大授業ライブ 学問への招待編』所収(東京大学出版会、2015年)pp.44-57.

梶谷真司「現象学から見た異人論 雰囲気の異他性と民俗文化」、山泰幸・小松和彦編『異人論とは何か ストレンジャーの時代を生きる』所収(ミネルヴァ書房、2015年)pp.25-44

古荘真敬、秋富克哉、安部浩、森一郎共編『ハイデガー読本』(法政大学出版局、2014年)全406頁

梶谷真司「精神医学との対話~『ツォリコーン・ゼミナール』」、上記『ハイデガー読本』所収、2014年、pp.294-303.

梶谷真司「規範としての「自然」 江戸時代の育児書を手がかりに」、鈴木則子編『歴史における周縁と共生 女性・穢れ・衛生』(思文閣出版、2014年)pp.289-306.

山本芳久『トマス・アキナス 肯定の哲学』(慶應義塾大学出版会、2014年)全282頁。

6. 研究組織

(1)研究代表者

古荘 真敬 (FURUSHO, Masataka)

東京大学・大学院総合文化研究科・准教授
研究者番号: 20346571

(2)研究分担者

石原 孝二 (ISHIHARA, Koji)

東京大学・大学院総合文化研究科・准教授
研究者番号: 30291991

梶谷 真司 (KAJITANI, Shinji)

東京大学・大学院総合文化研究科・教授
研究者番号: 50365920

高橋 哲哉 (TAKAHASHI, Tetsuya)

東京大学・大学院総合文化研究科・教授
研究者番号: 60171500

信原 幸弘 (NOBUHARA, Yukihiro)

東京大学・大学院総合文化研究科・教授
研究者番号: 10180770

野矢 茂樹 (NOYA, Shigeki)

東京大学・大学院総合文化研究科・教授
研究者番号: 50198636

原 和之 (HARA, Kazuyuki)

東京大学・大学院総合文化研究科・准教授
研究者番号: 00293118

山本芳久 (YAMAMOTO, Yoshihisa)

東京大学・大学院総合文化研究科・准教授
研究者番号: 50375599